



JWU 子育てサイエンス・ラボがスタートしました！

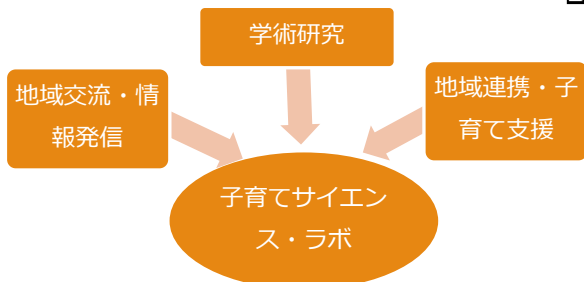
日本女子大学では1913年桜楓会託児所の開設に始まり、1928年には日本初の児童研究所を設置、以後も目白、西生田の両キャンパスにおいて数々のこども会が運営され、児童文学研究会や生涯学習センター、心理相談室といった子育てに深く関わる活動を長年行ってきました。

子育ては、子供を持つ親ばかりでなく、祖父母になった人、子供を見守る地域の人、学校等の教育機関の人等、多くの方のかかわる場であり、子育てがしやすい社会を考えることは、他の年齢層や立場の人にも生活しやすい社会を考えることに繋がります。また、子供の心身の発達、食事、衣服、教育、児童文学、子供の生活空間、子育てをめぐる経済学・社会学、等、日本女子大学の総合性を生かすことのできる場でもあり、これまでも多くの教員が子育てに関する研究・支援活動に携わっています。

こうした背景から、日本女子大学の創立120周年にあたる2021年、本学の総合大学としての学際性を生かし、「子育て×サイエンス」をキーワードに、社会連携教育センター内に「JWU 子育てサイエンス・ラボ」を立ち上げました。少子化社会、子育てが難しいといわれる社会において、子育ての在り方を科学的に研究・発信していくことは、日本女子大学の社会での役割を一層重要なものとする機会となると考えています。地域と連携しながら誰もが生活しやすい社会の創出に貢献できる場を目指し、子育てに関する「学術研究」「支援」「地域交流・情報発信」といった活動を展開します。

【JWU 子育てサイエンス・ラボウェブサイト】

https://www.jwu.ac.jp/unv/campuslife/external/jwu_kosodateciencelabo_top.html



ラボの仲間を募集します！

【学外の皆様へ】

日本女子大学の教職員とともに、サイエンス・ラボの活動に参加・協力くださるラボ会員を募集します！会員には以下の2種類があります。

A: 子育て情報会員：子育て中の方、子育てを終えたけど関心のある方、子育てを支える方など、子育てに関係する方が広く対象です。JWU 子育てサイエンス・ラボが発信する子育て関連情報をメール等で受け取ることができます。

B: ラボ協力会員：0歳から小学生程度のお子さんを子育て中の方が対象です。JWU 子育てサイエンス・ラボで行う研究調査・教育・事業等にお子さんとともに協力してくださる会員です。

協力をお願いする調査や活動については、都度詳細な内容や所要時間、謝金の有無等をご説明し、1回ごとに協力するかどうかを決めていただきます。

会員登録はこちらから（↓）

<https://forms.office.com/r/1bBeuyreWG>



【学内の皆様へ】

日本女子大学の学園内の教職員または学生で、子育てに関心のある研究・実践・交流をする仲間も募集します。

様々な子育て関連情報を受け取る「ネットワーク・メンバー」、ラボが主催する研究会で発表・交流等する「ラボ・メンバー」の2種類のメンバーシップがあります。

詳細はこちらをご覧ください（要学内認証）。

<https://www3.jwu.ac.jp/fc/jsc/labo/labo/recruiting.pdf>



ニュースレター ゆりのき に込めた思い

ゆりのきは、本学が創立された明治期にアメリカから日本に入ってきた木で、すくすくと天に向かって高く育ちます。キャンパス内の図書館付近にもあり、ゆりのような花をつけ、学生や豊明幼稚園・小学校の皆さんにも愛されていました。かつては「ゆりのきの家」と呼ばれる展覧会で発表した模型を実現した建物もあり、校長宅や学生支援の場として使われていました。ゆりのきの大きく育つ姿、そして研究成果を実現させた建物に込められた思いを引き継いで、ニュースレター名にしました。

子育てサイエンス・カフェを開催しています

子育てに関する最新の情報や研究成果を共有するために、子育てサイエンス・カフェを適宜開催しています（開催予定や内容は適宜ラボウェブサイトで発信）。第1回のカフェは長年西生田キャンパスで運営されてきた心理相談室の目白キャンパスへの移転にあわせて、これまでの活動と今後の展望が紹介されました。心理相談室は年齢を問わずどなたでもご利用いただくことができ、子育て支援活動も行っています。詳しくは下記 URL をご覧ください。

https://llc.jwu.ac.jp/exl/psyc/nlc_psyc.htm



=====**第2回子育てサイエンス・カフェ報告（6月19日実施）**=====

今回は家政学部児童学科の和田上貴昭先生に「外国にルーツのある保護者への支援—保育所の認識と工夫—」というテーマで研究発表をしていただき、その後参加者とディスカッションを行いました。

日本の経済活動に欠かせない存在となっている外国人は年々増加していますが、その人達への支援は十分ではなく、特に子育て家庭への支援は急務とされています。

保育所の保育士を対象とした調査から、外国にルーツのある保護者への情報伝達の難しさや、文化の違いから起こる問題が明らかにされました。保育所では、多様な母語に対して、絵カードや写真、翻訳アプリ、通訳等を利用して、繰り返し丁寧に伝える努力や工夫がなされていることがわかりました。しかし、一方で保育者たちは、情報が「伝わらない」ことに戸惑い、困っていることも明らかになりました。

「伝わらない」原因としては、さまざまなことが考えられますが、筆者の印象に残ったことを2点紹介しておきたいと思います。一つには、日本語がうまく伝わっていないということです。日本人が、日常的に使っている敬語（「おっしゃる」、「…なさいますか？」など）や漢字を使った言葉（駐車場、登園、記入など）は、外国人にとって理解が難しい言葉、表現であり、また、日本人にとっての常識が、外国人には通用しないことがあるようです。そのため、「やさしい日本語」で伝えることが重要であるということです。「やさしい日本語」の使用については、国でも日本に住む外国人に対しての災害や行政の情報伝達においてすでに進められている取り組みでもありますが、まだまだ認知度が低いといえます。

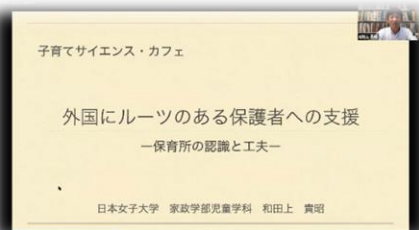
二つ目は、保育士は、保護者に「伝える」ことに一所懸命になるあまり、保護者から「聞く」、「様子をうかがう」ことが不足する場合が起こってしまうということです。すなわち、本来双方向でなければならないコミュニケーションが一方的になり、十分な意思の疎通ができていないというわけです。

これらの問題解決に対し、「やさしい日本語」の解説書の紹介、多文化理解のための実践例や外国にルーツのある保護者の保育所に対する認識などについての説明があり、保護者への支援に役立つ情報をたくさん学ぶことができました。

ディスカッションでは、現場の保育士の方々、社会福祉や心理の研究者の立場、学生など、さまざまな立場からの意見が聞かれ、充実した時間となりました。（文責 児童学科 安藤麻子）



発表者の和田上貴昭先生



Zoom を利用した遠隔での発表でした。

